

病院・高齢者施設の環境づくり Vol.1

急性期病棟で早期離床を応援するインテリア

1. はじめに

建築家のフンデルトヴァッサーは「人間には皮膚が5枚ある」と言いました。

1 人体としての皮膚 2 衣服 3 住居 4 社会環境 5 地球環境の5つです。

病院を舞台に考えてみましょう。

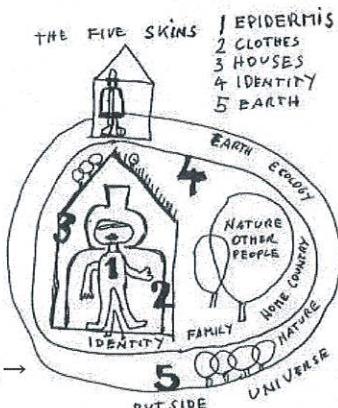
患者さんは入院すると2番目の皮膚（衣服）を脱ぎ、強制的に患者着を着る事になります。

3番目の皮膚である住居については病院では全く環境が変わります。4番目と5番目は病院という箱に入ると自分が社会の一員であるとか、地球環境の事とか思考さ

えも奪われるようになってしまふのではないでしょうか。

病院の建築、とりわけ内部環境、（インテリア）は第三の皮膚と言われる位、患者さんと大変近い距離にあります。インテリアは使い方によって人間の心理に影響を与えます。急性期で入院した患者さんの気持ちに働きかけ、早期離床、早期回復になるような一つの要素として考えていけたら効果のあるインテリア計画ができるわけです。

フンデルトヴァッサーの「人間の持つ5つの皮膚」→



効果のあるインテリアのポイントは何でしょう。それは人間の五感にどう作用するかに尽きると思います。五感に影響を与えるインテリア要素を分解してみると、「色彩」「光」「肌触り」「香り」「テイスト」などあります。これらの要素が様々に絡み合って空間を構成していくわけです。

ですから病院を造る時、また増改築の際に病院だから壁や天井の色は白系で。と決めつけたり、工事担当者や設計者に任せきりにせず、患者さんにとって心地よいものになっているか、回復を応援する雰囲気になっているかという視点を持ち、インテリア計画の内容をきちんと把握していく事が大切です。

2. 急性期の患者さんが病院内で何を感じるか・・・

急性期の時は処置や検査など機械類に囲まれる事が多く、オペ室や処置室はどうしても殺風景になります。しかしそういう時こそ、患者さんが安心できる環境は大切になります。

歩きまわれないためにベッド上で過ごす事が多くなり、視界に入るのは天井と間仕切りカーテンくらい。真っ白の天井、青白い蛍光灯、白いカーテン・・・殺風景な景色を眺めて、「一体自分は助かるのだろうか・・・」という不安な時間が経過するのはあまりにもお気の毒ではないでしょうか。

3. 天井のデザインが患者さんの回復を応援する一因に

さて、ここから具体的なお話をしたいと思います。

白い天井の正体はほとんどが吸音板です。吸音板には丸い穴が開いているもの、虫のような穴がたくさん開いているものなどありますが、今まででは殆ど白しかありませんでした。塗装をすると吸音レベルが下がる、耐火性能が落ちるという問題があり、白から脱却できませんでした。そして、病院の天井は“白”というのが常識でした。

最近、カラーの吸音板が出てきたので上手に取り入れてみてはいかがでしょう。天井を見つめる時間の長い患者さんに優しい天井が生まれます。

例えば大建工業から出ている天井板「ダイロートンカラー」は不燃認定されており、カラー展開も多色あります。（令和5年11月現在）

また吸音効果を妨げない塗料も出ていますので、リフォーム工事の際には今までの天井吸音板を使用しながら色を付ける事で天井の雰囲気を変える事も可能です。

最近は天井に壁紙を張る事例も増えました。壁紙なら色や柄も自由に選ぶことができます。



写真1 透析室の天井を空のような壁紙で

(神戸大山病院)

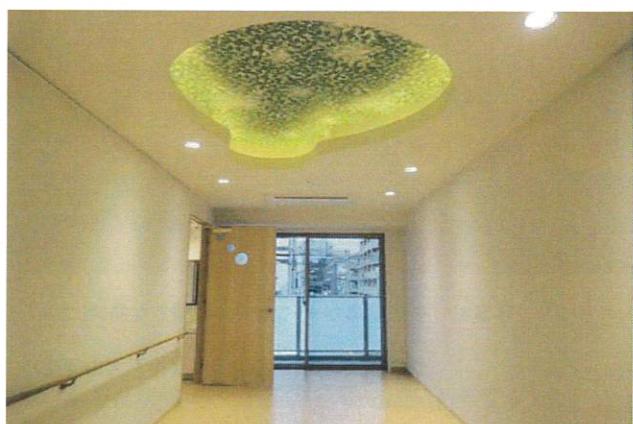


写真2 折上げ天井にして草原柄のクロス張りに

(東峰サライ)

4. カーテンが元気をくれる

急性期は管理が必要なため、ベッドの周りにカーテンをくるりと回すだけでプライバシーを保つには程遠い環境になる事が多いです。患者さんは白いカーテンを見つめて過ごす時間はとても長く感じます。白は緊張感を高める色なのです。ベッドから見える景色の大半がカーテンだからこそ色やデザインを考えてあげましょう。

もちろん様々な疾患の患者さんがいらっしゃいますから、うるさい柄や主張しすぎる色はかえってマイナスになります。邪魔にならない柄や色彩だと心が穏やかになれます。

事実、交感神経を高め心拍、脈拍、呼吸数を上昇させる色と、副交感神経を高め、リラックスさせる色がある事が実験でわかっています。

後者の色は自然界にある色、海や高原の緑、大地のベージュなどの色彩です。

またオリジナルプリントを施せるカーテンがあります。例えば北欧調の森をイメージした柄などは、優しく邪魔にならないデザインで患者さんに癒しを与えてくれる要素となりえるでしょう。

あるいは実際に撮った写真を持ち込んでカーテンにプリントすることも可能です。

多床室では窓際の人がカーテンでベッドの周辺を閉じた場合、廊下側の患者さんに太陽光が届きにくくなる場合が多いので、カーテンレールをアール加工して光を遮らない工夫も効果的です。

また、病院内廊下などのカーテンも単色でなく色を数色組み合わせればオシャレなカーテンができます。アートとコーディネートした色合いなども素敵です。

多くの病院で見るのであるが、患者さん側に縫い代が来る事が多いのは残念です。一番カーテンを眺めている時間の長い患者さんが生地の裏側を見ていることになるので、弊社では両面とも表になるように2枚の生地を縫い合わせるなどして外側からも内側からも裏表のない美しいカーテンになるよう工夫しています。

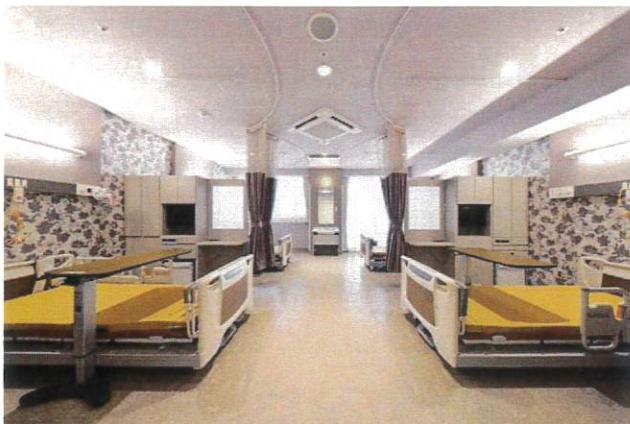


写真3 多床室のカーテンレールは優雅な曲線にして
太陽光が奥まで届くように（神戸大山病院）



写真4 お部屋によって変えたベッド周りのカーテン。
殺風景にならないようにストライプ柄で。（豊泉家病院）



5. 効果的な照明の演出で元気になる

ベッドの上にある蛍光灯の青白い光を見つめて入院生活、考える事は病気になった後悔のみ。。。

これは実際に私が看護師時代に担当した患者さんの事です。

入院された患者さんは、昼、夜の区別がつかず不眠になる事も多いです。それはベッド上だけの生活中になると、太陽の光で時間を感じる事が無くなり、人間の持つ「サーカディアンリズム（体内時計）」が狂うからです。

その問題を解決するために昼間は日中の太陽のような色温度（5000K）程度の光、夜になると眠りに入る夕方灯るろうそくの色温度（2000K）のように色温度が変えられる照明器具が出ています。自動で色温度が変化するように設定できる機種もあるので、これから新築、増改築なさる場合は照明の色温度にも注目してみると良いでしょう。

またベッドの上から降り注ぐ眩しい照明は患者さんの安眠を妨げますし、ストレスにもなります。間接照明を上手に取り入れて眩しさを無くす事も大切です。間接照明だけだと処置などの際に照度が足りない問題も出てくるので処置灯は別に単独で設ける事を考えた方が良いでしょう。



写真5 間接照明を基本とし、処置灯を眩しく
ない位置に設けた病室（神戸大山病院）

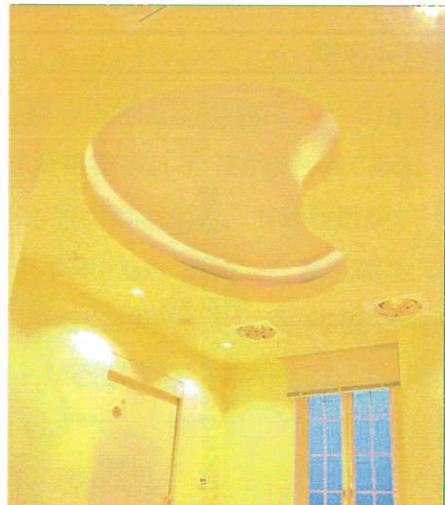


写真6 ハート型の折上げ天井と間接照明
(ファミール産院君津 LDR 室)

6. まとめ

第三の皮膚である住居、病院でいうと内部環境（インテリア）は、様々な要素が絡み合い構成されています。

一番大切なのは全体のバランスを考えることです。

機能性も大事ですが、とらわれ過ぎるとバランスを失い纏まりの無い空間になる事もあります。

色彩や照明や素材は、お料理でいうと具材のひとつであり全体として「感動するほどおいしいお料理」になるかどうかは全体のコーディネートに関わってきます。

「患者さんの早期離床を助け、元気を与える空間」にするためにコンセプトとして意識しひつひとつ、吟味して物を選ぶことが大切です。

1年～2年かかる工事期間中もコンセプトがあればたとえ予算を調整することになったとしても芯がぶれないで遂行される事でしょう。急性期の患者さんが機械に囮まれるだけでない回復への意欲がわく病院が出来ると思います。大切なのはその志だと思います。



戸倉 蓉子

【プロフィール】

株式会社ドムスデザイン 代表取締役

慶應義塾大学病院にてナースとして勤務後、
病院の環境を変えたいと建築デザイナーに転身。
看護師と一級建築士の資格を持つ建築デザイナー

【著書】

医療の場を整える環境デザイン（日本看護協会出版会）